

金子文子の東京生活

安元隆子^{*1}

A study on Kaneko Fumiko's life after moving to Tokyo

Takako YASUMOTO^{*1}

Kaneko Fumiko (1903-1926) had the idea that everyone is equal. She didn't recognize the Imperial ruling system of Japan early in the twentieth century. She wanted to prove that her point of view was correct by taking direct action. She moved to Tokyo where she studied and worked hard in order to be independent. In Tokyo, her despair with Christianity and Socialism forced her to turn to Nihilism. In this paper, I tried to research and understand her life after moving to the nation's capital.

【はじめに】

1925年、金子文子¹は「人間の絶対平等」を信じ、日本の天皇制のからくりを暴露し、その虚偽性を明らかにするために直接行動を志向した²。金子文子をこのような行動に駆り立てたものは何だったのか——。文子は父親が彼女を戸籍に入れなかったため尋常小学校入学が叶わなかった。「無籍」であることは「日本国民」として認められていないことを意味し、辛酸を舐めた体験。そして、植民地となった朝鮮で生活したことによって帝国主義下の日本の傲慢さと差別構造を知ったこと、つまり、当時の日本の「外地」から「内地」をみつめ、朝鮮を併合しながら同時に差別する当時の「日本」という国の本質を知らされた体験などが挙げられよう。しかし、文子は、苦しめられるだけ苦しめられたおかげで「私は私自身を見出した」³と語り、朝鮮から帰国後、自立を目指して上京する。そして、苦学生活を送る。だ

が、その生活に疲れ、資本主義社会の矛盾を実感する。このような文子にとって、宗教や社会主義思想は救いにはならなかった。この体験も文子を虚無主義、そして、直接行動主義に駆り立てた大きな原因になったと思われる。

これまで金子文子研究は裁判記録や訊問調書が重要な資料として扱われ、自叙伝『何が私をかうさせたか』(1931年、春秋社)は、彼女の思想形成過程を知るための補助的な読み物として扱われてきたように思う。しかし、表現の細部にこだわり、作品として読むことで、裁判記録や訊問調書にはない金子文子の内面の揺れが浮かび上がってくる。本論では、金子文子の思想形成過程を理解するために、自叙伝『何が私をこうさせたか』⁴に描かれた上京後の生活、特に、苦学生としての生活と宗教への失望の部分について、背景のコンテキストを明らかにすると共に、文子の内面を検証する。

*1 日本大学国際教養学科 教授 Professor, Department of Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

【Ⅰ】上京一虚栄心との訣別

『何が私をこうさせたか』によれば、朝鮮から帰国後、父親の家の床の間の障子の近くに置かれた一つの机の上には、原稿用紙や封筒の他に、「夜店にさらされているような旧式な英和辞書がきちんと積み重ねられ」ていて、文子は「父はこうした外見で、その下劣な人格や空っぽな頭やを糊塗しようとしているのであった」⁵と思わずにはいられなかった。このような嘘ばかりで塗り固めた生活、見栄ばかり張りたがる生活を送る父に文子は嫌気がさす。また、母から父を奪った叔母に対して文子は憎悪ではなく愛情を感じていたが、その叔母さえもが偽物の金の指輪をして満足しているのを見て、「ああ、叔母もとうとう、父に感化されてしまったのだ。どうしてこの人達は、こんなさもない見栄坊なんだらう」と不快に感じる。そして、弟の賢が県立中学に入学した時、誂えた靴が8円だったのに12円とうそを言い、それが露見するとあくまでも言い逃れようとする父親の姿を見て口論となる。遂に文子が上京して苦学をしようと決意し、実行したのは1920年（大正8年）、17歳の春のことであった。

このように、父との対立が我慢できないものとなったことが文子を上京に駆り立てたわけだが、憎んでいたのは父親に根付く「虚栄心」であったことを見落としてはならない。この憎むべき「虚栄心」と訣別し、自己を確立することが文子の上京の隠された目的となったからである。

しかし、この「虚栄心」との訣別はそう容易なものではなかった。なぜならば、それは父親特有のものではなく、文子自身にも深く内在するものであったからだ。この点については本論【Ⅳ】において再度触れたい。

【Ⅱ】苦学生・文子の生活

文子が新たな人生の開拓場所として選んだ土地は「東京」だった。「学問で身を立てようとするものにとって、東京ほど魅力のある誘惑はない。」「東京こそはまことに、私の生活を打ち建てるべき未墾の大広野なのだ。」と書いている⁶。明治

の日本人が『学問のすゝめ』と『西国立志編』の影響を受け、勉強することで賢人となり、官に用いられ富貴となることを信じて上級学校進学を目指したことは周知の事実であろう。そして、竹内洋氏によれば⁷、「受験」という言葉が頻出するようになるのは明治30年代後半のことだという。また、「受験」という言葉の頻出と共に、働いて学資を得て学問する「苦学」や中学校講義録などの通信教育による「独学」が本格的に行われるようになったのも明治30年代だと考えられる。例えば、「日本力行会」という苦学生に職業を紹介し援助する組織が明治30年に設立されたが、明治末までの会員は推定15,000人である。明治33年には、苦学生のための雑誌『苦学界』や『成功』も刊行された。こうした状況を踏まえ、明治30年代にはこれまでとは異なる、人的ネットワークのない士族以外の貧しい階層に上京熱が広がったと竹内氏は指摘している。女子医専を目指して上京した文子もまさにこの人的ネットワークに頼らない「裸一貫型」（自立自活）苦学の実践者の一人だったと言えるだろう。文子が上京した前後にも、東京実業研究会の『東京苦学成功法』（大正3年、1915年）や深海豊二『立志成功苦学の裏面』（大正4年、1916年）、野木愛太郎編『苦学と就職思ひのまゝ』（大正5年、1917年）、大生川志郎『最新東京苦学案内』（大正9年、1921年）、出口競『東京の苦学生』（大正9年、1921年）などの苦学に関する書物が多く刊行されている。

このような苦学ブームに呼応して、苦学生の向学心を餌に次のような悪徳業者もはびこったという。

「青年立志社」などというそれらしい会社をつくり、苦学生募集を広告し、入会金や保証金を巻き上げる。不潔な狭い部屋に雑居させて寄宿料をとる。人夫などの過酷な労働に紹介してピンハネする。あるいは怪しげなモグリ学校をでっちあげて、月謝を巻き上げる。看板や広告には何何塾とか何何学者とかあり、教師は〇〇博士や学士と麗々しい。しかし広告に書いてある教師は、ほとんどあらわれない。授業をやるのはゴロツキ書生あがりという按配。⁸

『何が私をこうさせたか』によれば、上京直後、

大叔父⁹の住む下谷区三ノ輪の家に突然押しかけたにも関わらず、大叔父は文子を受け入れてくれた。しかし、彼は学問で身を立てようとする文子の計画に賛成するのではなく、「ミシンでも覚えて、堅気な商人にでも縁づいた方がどんなに合わせかかも知れない」と諭す。これに対し、あくまでも「独立して自分のことは自分でする」生活を目指す文子は「自分で苦学の途を探します」と宣言し、約一か月後、「苦学奮闘の士は来たれ……螢雪舎」のピラを見つけ、上野広小路に近い上野町の新聞取次ぎ業をしている「白旗新聞店」¹⁰で働くことを決めたのである。

実は、文子が身を寄せたこの白旗新聞店はまさにこの手の悪徳業者の一つであったといわざるを得ない。白旗新聞店には文子のような苦学生が8人おり、昼間通学する者は夕刊を、夜間通学する者は朝刊を売っていたとある。このような売り子の集めて来た小銭を両替店に持っていき、いくらかの歩合をもらってくるのを内職としていたのが新聞店のおかみさんだった。上野の三橋に立ち尽くし「夕刊、夕刊」と声を上げ新聞を売る若い女の苦学生に対し、多少の同情からか釣銭をとらない客もいて、それをそのまま文子は持ち帰っていたが、このおかみさんは売り上げが不足している時には文句を言うものの、多い時には知らん顔をして自分の金庫に入れ、着服したのである。それだけではない。新聞店の主人は、初め文子に対し好意的に新聞の売れ上げのよさそうな場所を提供してくれたのだったが、苦学生に対して「与うるよりは取る方が多すぎている」ことに文子は気付く¹¹。

店主・白旗の人格は文子の父の人格と似ていて、家庭も似ていた。おかみさんは先妻を追い出し白旗の妻の座を射止めたが、白旗は今も先妻の生活の世話をし、二人の妻を持っているようなものだった。それ以外にも船橋あたりにおなじみの女がいて通い続け、それが原因でおかみさんとの間に喧嘩が絶えず、時におかみさんはヒステリー状態になってしまう。一方、先妻は裏長屋の住居費は白旗に頼っているものの、生活費は白旗新聞店からの新聞を売って捻出している。おかみさんはこのような先妻を乞食扱いしていじめる、とい

う状況なのである。文子は次のように書いている¹²。

私はこの家に来てからも実に、私自身の家のありさまを、そっくりそのまま見せつけられているような気がして悲しかった。しかもこれは、金があつての上のことだからその金も苦学生が血の汗を流してためた零細な小銭をためた金なのだ—なおさら始末がわるかった。(傍線論者)

女性にふしだらな店主、文子の父を彷彿とさせる白旗が使うその金は、身を粉にして働いた文子ら苦学生によって得られたものだったのである。文子は、それを搾取され女性関係に使われてしまうことへの憤りを感じずにはいられなかった。そして、このままでは勉学を続けることが困難なことを鑑み白旗新聞店をやめようとする文子に対し、白旗は売り上げの悪い場所を指定し、一晩で50銭の借金を増やして三ノ輪の大叔父に返済を迫る。

このように吝嗇な白旗のやり方は白旗夫婦に共通しており、彼らの行動原理は「金銭」以外の何物でもない。そして、自分たちが汗水流して働くのではなく、苦学生たちが汗水流して得た労働収益を搾取しているのである。一見、苦学生を支援しているかのように見せながら、内実は苦学生を食べ物にする悪徳業者の一部だったと見て間違いないだろう。特に下線部に込められた怒りは、文子が刑務所で自ら縊死を遂げた後に遺された短歌をまとめて栗原一男によって刊行された『獄窓に想ふ』の次の歌¹³に結晶している。

人がまた等しき人の足になる日本の名物人力車かな

ブルヂュアの庭につつじの咲いて居りプロレタリアの血の色をして

こうした社会認識と怒りが彼女を虚無主義や直接行動主義に至らせる要因となったのだ。

さて、このような白旗新聞店に身を置きながら、文子は入学金などの金を前借して学校に通ったとある。店主は女学校に通うことを勧めたが、文子は英数漢を専門に学んで女学校卒業の検定を受け女子医専に進もうとして、英語は正則学校、数学は研数学館、漢文は二松学舎に通うことを決めた。しかし、時間の都合がつかず、二松学舎は

1日も通わず、研数学館では代数の初等科に、正則では午前部の1年に入ったとある¹⁴。この正則英語学校は1896年（明治29）年に、英語教育者であり、『熟語本位 英和中辞典』（岩波書店）の著者として有名な斎藤秀三郎が神田錦町に創立した学校で、1899年（明治32年）に生徒3,000人を超え、翌年には3階建て600坪の校舎が立てられたことがわかっている。研数学館は1897年（明治30年）に奥平浪太郎が開校した数学の私塾で、以後、理数系専門学校を経て大学受験の総合予備校として最近まで予備校として存在感を示していた（2000年閉校）。こうした受験のための学校が次々とでき、1907年（明治40年）には東京の神田は予備校の町と化したという¹⁵。文子はこのように神田に集う多くの苦学生の中の一人だった、ということになる。

『何が私をこうさせたか』に描かれた苦学生・文子の一日を追うと次のようである¹⁶。正則で正午まで学び、3時まで研数学館にいて、帰宅後、冷や飯をかき込んで4時には三橋付近に新聞の籠を下げて立つ。労働時間は夕方4時半から夜中の12時半ごろまでの8時間で、立ち通しである。帰宅後は文子の部屋で同じ苦学生たちが新聞の売り上げを確認するため、すぐには眠れない。その間、翌朝の米を研いだり、食器を洗って片付けたりしていたら、いつの間にかそれが文子の仕事となり、寝るのは1時か2時、風呂に入る間もない。そして、朝は7時に起きて、部屋を掃除し食事の支度をし、8時には家を出るが学校までは電車で30分はかかる。子供を幼稚園に送ることを命じられると1時間目には到底間に合わない。下手をすれば、2時間目も終わってしまう、という有様だ。何よりも、睡眠不足から折角授業を受けていても、眠ってしまうのである。

このように苛酷な文子の生活が特別なものだったのかといえば、決してそうではない。文子とほぼ同時期の大正7、8年くらいの新新聞配達の苦学生生活は次のようだった¹⁷。

新聞配達は朝の四時から始まった。受け持ちは二〇〇件。六時ころに配達がおわる。その後、正午まで睡眠。午後は集金と勧誘。したがって、昼の学校に通うのは不可能。収入

は一ヵ月一円、配達人は通常販売店に住み込みだから住居費はいらない。しかし弁当代が七円。布団代や銭湯、散髪が二円から三円。あと暑いときに氷水やラムネ、たまには大福餅などを食べたりすれば、お金は残らない。

新聞配達の新新聞の生活は、夜と昼の通学の違いはあるものの、文子の書いた新聞店での苦学生生活とほぼ同じである。文子はまさに典型的苦学生だったといえるだろう。彼女はその後、露店商人となり、そして、行商をすることを選ぶのだが、結局、食に事欠く生活は変わらず、時間の融通は利くようになったものの月謝の工面がつかないことから学校は正則だけにしてしまう。そして、宿代に困った文子がついに、東京に出て来た唯一の目的である学校をもやめて女中奉公をすることになるのである。

苦学の道を全うできない文子は意志薄弱であったのだろうか。いやそうではないだろう。「苦学は体力と禁欲的精神さらに幸運が重ならなければ成就しないまことにか細い道だった」¹⁸という指摘がある。というのも、先に取り挙げた日本力行会の会長は、苦学は百人に一人しか初志を貫徹しないといい、また、別の統計では苦学サバイバル率は4.6パーセントに過ぎないことが示されているからだ。多少の差異はあるものの、いかに苦学を貫徹するのが難しいことかがわかる。そして、苦学は様々な都市浮浪者や失意の帰郷者を生んでいく。文子も初志を貫徹することができなかった多くの苦学生と同じ運命を辿ったということになるだろう。この後、女中奉公先の浅草聖天町の仲木家¹⁹においても大旦那の女性関係や潔癖家の大奥さん、嫁姑問題、気障でできのあまり良くない息子たちなど、家の雰囲気は文子の肌にならなかつただけでなく、過度の労働と睡眠不足によって結局こどもも去る。この後、「主義者」のところに居候したあげく、また、大叔父のところに戻り家事手伝いをしながら通学をするようになるのだが、その頃を回想した『何が私をこうさせたか』の章には「街の放浪者」という題名が付いている。金子文子もまた「苦学」が生み出す都市浮浪者の一人でもあったといえよう。そして、これらの経験

が社会の不条理に眼を向けさせ、その「不平、不満、反抗の精神にみたされた一個の漫然たる反逆児」²⁰文子を生んだのである。

ここで「苦学」の表象としての「リーダー」という言葉についても触れておきたい。

当時の典型的な苦学生であった文子は、露天商として夜、『講談倶楽部』や子供雑誌、彩色刷りの浮世絵などを売る古本屋、そして、とうもろこし屋、古着屋、万年筆屋、植木屋、玩具屋などと並んで、粉石鹼を売る。その場面を次のように描いている²¹。

私の店には第一、品物を並べる台がなかった。地べたに新聞紙を四、五枚敷いたその上に商品が載せられているのであった。(中略)あまりに目立った貧弱さである。商品の後の方に、これもやはり新聞紙を敷いてその上に私は、膝にひろげたリーダーを置いたまましょんぼりと座って客を待っているのである。周りの露天商が憐れむほどの粗末な露店で、一晩の売り上げが50銭から70銭、そのうち3割は口銭として取られ、仕入れさえままならず、食べることに窮する生活が続く中、文子は膝の上に「リーダー」を広げて勉強しようとするのである。「リーダー」とは英語教科書のこと。多分、文子の場合には正則英語学校で用いていた教科書であろう。先に挙げた文子の『獄窓に想ふ』の「自序」に掲げられた短歌の中に「我が好きな歌人を若し探しなば夭くて逝きし石川啄木」²²の一首がある。その石川啄木の晩年の詩「飛行機」²³の中にもこの「リーダー」が登場している。

飛行機

一九一一・六・二七 TOKYO.

見よ、今日もかの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまたまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたつた二人の家にて、
ひとりせせとレイダアの独学をする眼の疲れ

見よ、今日もかの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。

給仕勤めの少年がたまたまに非番の日曜日に肺病やみの母親と共にいる家の中で手にしているのは「リーダー」である。実は、苦学ブームの背後には、もう一つ「独学」という世界があった²⁴。上京＝苦学ルートにのれない者、またはその予備軍が利用したのが中学講義録などの独学媒体だった。中学教育を独学する者のための通信教育である講義録は明治30年前後に登場し、以後多くの通信教育社が生まれた。例えば大日本国民中学会という団体は、入会金が30銭、一カ月の会費は45～50銭。講義録は毎月2回送られ、30ヵ月で中学の全科目を修了するという課程で、実数は不明であるものの、大正3年の会員数は20万人を超えると考えられている。諸事情により上級学校進学を閉ざされた高等小学校卒業生、また、僻地にあつて師に恵まれない者や、家事や仕事によって時間通りに中学校に通学することができない者のための通信教育が中学講義録なのであり、苦学と並んで独学も広く浸透していたのだ。啄木詩の中の少年は、その家庭環境から上級の学校に進学することもできず、通信教育で講義録を学んでいたという設定なのだろう。「レイダア」はまさに独学を象徴し、「飛行機」は、未来を信じて努力を続ける少年の遠い希望を象徴するものとしてある。少年に飛行機を高く見つめることを呼びかける啄木の詩は美しい。その中で独学の象徴としてあつた「レイダア」は、金子文子にも苦学生の象徴として引き継がれている。文子が正則英語学校で知り合った労働運動によって失職した大野某も「私の真ん前の机に腰をかけ泣き声を出してレイダアを読んでいた。」²⁵と描かれている。彼は文子に社会主義の情報をもたらした存在でもある。彼の体験した東京市電従業員のストライキの意味については、金子文子の社会主義への傾倒と別離と共に別稿で論じることとする。

【Ⅲ】キリスト教への親近と幻滅

こうした苦学生・文子の周りに登場するのが仏教救世軍、キリスト教救世軍、そして社会主義者の一団だった。売れない新聞を抱え途方に暮れて

いる文子に声をかけたのは、若い車夫で自分と同じ研数学館の代数科に通う苦学生の伊藤であった。伊藤はこのような新聞売りの仕事を続けることの無益さを伝え、文子の相談にのる。伊藤はクリスチャンで救世軍の軍人であった。実は「第一回 証人訊問調書」²⁶によれば、彼の本名は齊藤音松であり、救世軍の軍人であったことは同じであるが、文子がかいていたように研数学館で一緒だったのではなく、人力車夫をしながら麻布の獣医学校に通い苦学していた学生であった。

自叙伝中の伊藤（齊藤音松）が所属した救世軍とは、周知のように、英国で始まったキリスト教（プロテスタント）の福音主義を代表する団体である。誰でも主イエスの十字架の償いを信じる信仰を持つことで救われ、キリストに似た愛の人となり豊かな人生を歩むことができるとする。そして、イエスを信じる人々と共に復活の恵みを受けることができると信じ、この福音を世界中の人々に伝えることを使命としている。特徴的なのは、教会が小隊、信徒を兵士、伝道者を士官、牧師にあたる人を小隊長、各国の責任者を司令官、最高指導者を大将と呼ぶなど、組織に軍隊の観念を取り入れていることである。現在でもキリストの愛と聖書の言葉を武器に、神の愛を実行するために伝導と福祉を行い、災害時には救援や支援活動も行っている。

白旗新聞店を出て、黒門町の救世軍の小隊を訪ねた様子を文子は次のように書いている²⁷。

程なく集会が開かれ、祈禱があったり、讚美歌が歌われたりしたようだった。私にはしかし、そんなことはすべて素通りした。（中略）

説教が終ると讚美歌がまた歌われた。そのリズムは大浪のうねりのように澎湃として捲き起って来るような力をもっていた。何かしら自分もその波の上に乗ってどこか広々としたところにつれて行かれるような気に私は襲われた。

自ら感激にせまって言葉もつまるような少佐の祈禱がそれにつづいた。悩める霊に代ってその救いを求める少佐の祈りは必ずきかれなければならぬような気もちを起こさせるの

に十分であった。（中略）

酔えるものの如く私は感激していた。いっさいの苦悩を忘れて、みんなと一緒に私も神を讚美していた。そうして私は、いつの間にかクリスチャンの仲間にはいつの間にかいたのであった。

救世軍ではごく初期より、歌は重要な要素と見られていた。「救世軍の音楽に発揮された創造的力こそ、救世軍史のもっとも特筆すべき項目である。」²⁸という。これを裏付けるように、文子の宗教体験は荘厳な讚美歌の響きに促された結果の感性的情緒的なものであったと言わざるを得ない。救世軍では、公開の集会での「証言」（あかし）によって主を悦び祝う。路傍、室内に拘わらず、回心者に「証言」させ、これにより証しする回心者の救いを受け、信仰を強めただけではなく、「証言」を聴いた無数の魂が神に導かれるのである。「証言」は救世軍において特質というべきものであろう。まさにこの「証言」の中で、じっとしていられなくなった文子は何かしら頼るべきものが手招きしているように思われ、「何だかわけのわからぬ力に引きつけられて」「小隊長の脚下の床に突伏してただわけもなく泣いた」²⁹ではなかったか。そして、文子は小隊長に問われるままに答え、人々はこの救われた一人の姉妹のために祈ったのであろう。

この場面は救世軍の「恵の座」を想起させる。「恵の座」とは、人が救いを求め跪いて祈る台座のことであるが、それは具体的な場所そのもののみを示すのではなく、信仰の土台となる場、つまり、神と人との間に契約が結ばれる場を指す。換言すれば、罪の重荷が取り除かれ、神と交わり心に真の満足が得られる場、悔い改めの場ということもできるだろう。救世軍では、悔い改めの座に跪き、人々の前でひれ伏すことで自尊心を棄てることができ、神と結ばれることが可能になるといふ³⁰。そして、悔い改めのために前に進み出るように押し出すのは「感動の高まり」だと考えられている。ウイリアム・バロウズの『恵の座』によれば、ローラ・ペトリ博士は救世軍についての心理学的研究の中で次のように書いている。「救世軍人は、まず、人の感情を捕らえる。それから感

情が意志を抑制する、意志が直接の行動に駆り立てる」³¹。次に示す信者の体験談³²は、この感情の高まりが顕著な例だ。

祈禱会が始まっていた。私は皆の嘆願と信仰の的になっていた。(中略)

士官が私に言った。「神様にチャンスを与えなさい。悪魔によく仕えてきたあなた、神様によく仕えるようにしてみなさい。」説得が続いた。皆の歌う歌は感動的だった。祈りは熱烈で、続いていった。心がくじけそうになる衝動と戦ううちに、私の内部に感情のうねりが起こり、私の身体が震え始めた。

今までのひどい人生を悔やみ、数々の機会を失ったこと、あらゆる悪事、無駄にしたチャンスなどを思い、それらが波のように私に押し寄せてきた。その緊張にもうこれ以上耐えられなくなった。そこにいる人たちを離れて出ていくか、悔い改めの座に出ていくかしなければならなかった。私は悔い改めの座にひざまずいた。

この体験と文子の体験とは極めて似ている。ただ、文子は讃美歌や少佐の祈りの特有な宗教的雰囲気感に感化され、懺悔し、祈ったのであり、「何だかわけのわからぬ力」³³に引き付けられたのである。問われるままにこれまでの辛苦に満ちた過去を語ることによって魂の浄化はなされたものの、それは神と一体化し「救われた」のではなかった。皆と共に神を讃美するために前提となる神との交わりはなかったと考えられる。というのも、この後の生活の中で、「祈り」を勧め、「奇跡」を信じることを勧める伊藤に対し、文子は思う。「私は、神に仕え、人に奉仕した。けれど私はその報いを得なかった」³⁴。「報い」とは、ここでは食べることや職業を意味するだろう。つまり、文子にとって現実を明らかに改善することなくして宗教は意味がないものであったのだ。文子の信仰の基盤が情緒的、雰囲気的なものであった以上、神の救いが不確かなものであったのは当然のことであろう。

基督教の教えるところは果たして正しいのであろうか。それはただ、人の心をごまかす麻醉剤にすぎないのではないだろうか。人間の

誠意や愛が他人に働きかけて、それが人の世界をもっと住みよいものにしない限り、そうした教えはついに何らかの欺瞞でなくて何であらう。

この部分は、明らかに宗教は人々を酔わせるアヘンであるとして退けたマルクスの『ヘーゲル法哲学批判序説』の一節を彷彿とさせる。齊藤の證人訊問調書には文子が聖書を破った、と聞いて、キリスト教信仰への勧誘をあきらめたことが記されている³⁵。

一時的にせよ、もう一つ文子を宗教に傾けさせたものがある。それは伊藤の存在そのものであった。祈りや奉仕は「伊藤がそうしろと言ったからで……」³⁶とあり、決して神の救いを体感したからではなく、伊藤の存在がそうさせたことを打ち明けているのである。文子は伊藤への信頼がますます深まり、金を工面したり、何かしら伊藤のために作ったりしたとある。伊藤は文子のことを「不良少女」だと思っていたが、「あなたは本当の愛の人だ」と認める。と同時に、文子を隣人として観ることが出来なくなり、信仰が揺らぎ苦しいと訴え、別れを告げた。文子は「何という臆病な愛の使徒だろう」と思い、別れを受け入れる³⁷。ここには伊藤を男性として見、恋愛の発展を期待していたにも関わらず、それが叶わなかった文子の失望が読み取れる。ただ、この別れについてはこの『何が私をこうさせたか』と訊問調書とでは、微妙なニュアンスの違いが存在している。今述べたように自叙伝では、文子と伊藤とは肉体的な関係はなく、文子の恋心は叶わず、それは宗教への失望に重なっていく。しかし、「第三回 被告人訊問調書」³⁸には、

或る時同人は私に「私は貴方に対して隣人の愛の域に止まっていることが出来ない。幾ら抑へても性愛に為ってしまふ。私の信仰がぐら附くのが恐ろしいから今日限り貴方と会はぬ」と申しました。同人に対して何等の感情を持つて居なかつた私は、夫れは御邪魔しましたと申して同人と別れましたがその後で私は愛を旗印として路傍に宣伝する「クリスチャン」が偽らざる愛の実行を阻まれるといふことは何という矛盾であろうか彼らは自分で

造り上げた神といふ名称の前に自ら縛られ臆病である信仰の奴隷である人間には外力に左右されない裸体で生きるところに人性としての善美があるに相違ない。その善美に背く愛を説くキリストに親む必要はないと思つて、所謂キリスト教を捨て、仕舞ひました。

とある。「何等の感情を持つていなかつた」と言うが、ここに至るまでの愛情の芽生えは捨象して表現していると思わざるを得ない。相手の齊藤音松の証人訊問調書では、文子に対して一時恋をしていたことを認めている。また、神田明神の境内で一度性交があったことも証言しているのである³⁹。文子は自叙伝の執筆によって我が来し方をまなざした時、一度は芽生えた恋愛感情とその挫折を追体験し、それが宗教への幻滅と重なり、文子の思想形成の一要素になったことを認めたのにちがいない。しかし、訊問では、こうした恋愛感情を否定し、彼女の思想そのものを表現していると考えられる。このように微妙なニュアンスの違いはあるものの、いずれにしても、文子の信仰生活はここで終わりを告げる。

【IV】 苦学と文子—「虚栄心」の時代

以上、文子の東京時代の苦学の実態を検証してきたが、次に、苦学生として生きる文子の意識を問題としたい。まず、注目したいのは、学校を選んだ時の述懐である。文子はほとんど女の生徒のいない正則英語学校と研数学館を選んだ。その理由は女の仲間に入り衣類の競争などに巻き込まれる煩わしさから逃れるため、そして、女ばかりの学校は程度が低く、生徒も教師も学問には熱心でないから進歩が遅いからだとした。同時に次のようにも書いている⁴⁰。

男の学校にはいって男と机を並べて勉強するということは、一方で普通の女より一段と高い才能を持っているような気にもなり、他方では、男と競争しても負けはしないぞといったような男子に対する一種の復讐的な気持ちも加わっていて、自分にもはっきり意識しない虚栄心もそれに手伝っていたのである。

ここから読み取れるのは、文子の中の潜在的な男

尊女卑の意識である。文子は、女性は見た目だけを気にする皮相的で軽薄な存在であり、そんな女たちと自分を一緒にされたくない、女性より秀でた男性と対等に学ぶことで自分を認めることが出来ると考えている。ここに透かし見えるのは、文子の中に潜む男性が上位で女性が下位、という意識そのものであろう。また、男に負けまいとする気持ちを「一種の復讐的な気持ち」と言い換え、叔父でありながら文子の「処女性を破った」叔父の元英⁴¹をはじめ、これまで文子を抑圧してきた世の中の男たちへの報復の意味を重ねているが、そこにも文子は自らの「虚栄心」を重ねているのである。この「虚栄心」は伊藤との出会いの場でも発動している。苦学生らしき風貌の伊藤を見て、文子は「自分も苦学をしているのだという一種のヴァニティーも手伝って私は急に元気づいた。」⁴²とある。つまり、苦学していることが自らを強く大きく見せることに通じているのであり、それは純粋な学問の在り様から外れていると言わねばならない。

実は、先に触れた文子の苦学生生活の中で、露天商をしても売れ行きが思わしくなく文子は行商を試みるが、見も知らぬ他人の家になかなか入っていけない。その際にも「これはまだ虚栄心を取り去り得ないからだ」と考える場面がある⁴³。「自分」を「自分」以上に見せようとする心の在り様が問題とされている。この「虚栄心」は仲木砂糖店で女中奉公していた時にも文子の中で発動していたことが書かれていた。過度の労働と睡眠不足の中で、主家に気に入られたいばかりに同僚のおきよさんを出し抜いて早起きをして食事の準備をしたり、仲木砂糖店の息子である仲ちゃんの自尊心を傷つけてまで自分の優越を誇ろうとしたことを懺悔しているのだ。つまり、そこに自分をよく見せようとする見栄を張る「虚栄心」が存在していたことを認めているのである⁴⁴。しかし、もし絶対的な自我を確立すれば他者を意識して自己を大きく見せる必要はない。そして、この「虚栄心」は、本論【I】で触れたように、否定すべき文子の父を象徴するものだった。軽蔑していたその「虚栄心」が文子の中にも巣くっていたことになる。苦学時代の文子は存在の基準が自己にはな

くまだ他者や社会に在り、それは乗り越えなければならぬ自分自身の姿でもあった。

こうした文子の「虚栄心」との戦いは『獄窓に想ふ』の次の歌⁴⁵にも表されている。

ヴワニティよ我から去れと求むるは只我ある
がままの真実

文子はこの後、「私は私自身を真の満足と自由とを得なければならない」「私は私自身でなければならぬ。」⁴⁶と一歩突き抜けた心境を語る。だが、まだそこに至るまでには、資本主義社会の不条理を解消するものとして期待したにも関わらず幻滅を感じ訣別した社会主義、そして、新山初代、朴烈とを通して至りついた虚無主義との出会いを経なければならない。それらについての検証は別稿に譲りたい。

【註】

1 金子文子の略歴は以下である。1903年、横浜市生まれ。父・佐伯文一は文子を戸籍に入れず、以後、文子は無籍者の悲哀を味わうこととなる。後、父母は別離し、母・金子きくのは文子を置いて他家へ嫁ぐことを繰り返した。1912年、親類に引き取られ、朝鮮忠清北道清州郡芙蓉面美江里に移り、芙蓉公立高等小学校卒業。1919年、朝鮮にて三・一運動が起こり、他人のことは思えないほど感動する。同年、山梨の母の実家へ戻る。1920年、上京し、新聞売り、露天商、女中などしながら苦学する。1921年には、社会主義者・堀清俊方に住み込め、後、「社会主義おでん」屋に勤める。1922年、朴烈と知り合い同棲。黒涛会機関紙『黒涛』創刊。また、朴・金子で「不逞鮮人」をもじった『太い鮮人』創刊。朴烈は爆弾入手のため金重漢に上海への連絡を依頼した。1923年、関東大震災が起き、朴・金子は保護拘束される。同時に不逞社員16名が治安警察法違反容疑で起訴される。1924年、予審。爆発物取締規則違反容

疑で追起訴され、1925年、刑法第73条にあたるとして大審院管轄事件となるも金子文子は転向を拒否、自叙伝の執筆を開始する。1926年、大審院公判。朴と金子は獄中にて婚姻する。大審院は朴・金子に死刑判決。約一ヵ月後、恩赦により無期懲役となるも金子文子は獄中で縊死。享年23歳。遺骨は朝鮮聞慶面八霊一里に埋葬される。現在、聞慶に「朴烈義士・夫人金子文子女史記念館」が建設され、文子の墓は敷地内に移されている。

2 「第一二回 訊問調書」(大正13年5月14日、市谷刑務所)には次のようにある。「すべての人間は完全に平等であり、したがってすべての人間は人間であるという、ただ一つの資格によって人間としての生活の権利を完全に、かつ平等に享受すべきは必ずのものであると信じております。(中略) 神聖不可侵の権威として彼らに印象されているところの天皇、皇太子なる者が、実は空虚なる一塊の肉の塊であり、木偶に過ぎない(中略) 少数特権階級者が私腹を肥やす目的の下に財源たる一般民衆を欺瞞するために操っている一つの操人形であり愚な傀儡に過ぎないこと(中略) 神国と迄見做されている日本の国家が実は少数特権階級者の私利を貪るために仮設した内容の空虚な機関に過ぎないこと(中略) 己を犠牲にして国家のために尽すという(中略) かの忠君愛国なる思想は、実は彼らが私利を貪るための方便として美しい形容詞をもって包んだところの己の利益のために他人の生命を犠牲にする一つの残忍なる欲望に過ぎないこと。(中略) 他愛的な道徳、(中略) 権力への隷属道徳等の観念が、実は純然たる仮定の上に現れた一つの錯覚であり、うつろなる幻影に過ぎないことを、人間に知らしめ、それによって人間は完全に自己のために行動すべきもの、宇宙の創造主はすなわち自己自身であること(中略)を民衆に自覚せしむるために私は坊っちゃん(論者註:皇太子)を狙っていたのであります。」

3 『何が私をこうさせたか』(『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』、鈴木

- 裕子編，2013年3月，梨の木舎） p.198
- 4 『何が私をこうさせたか』（『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』，鈴木裕子編，2013年3月，梨の木舎）をテキストとして用いた。
- 5 註4のp.164
- 6 註4のpp.197～198
- 7 『立志・苦学・出世 受験生の社会史』竹内洋，（2015年9月，講談社） p.88, p.128
- 8 註7のp.132
- 9 「第二回 証人訊問調書」（大正14年8月29日，市谷刑務所）（『朴烈・金子文子裁判記録』，1977年9月，黒色戦線社） p.241によれば「窪田亀太郎」。
- 10 註4のp.199, p.200, pp.203～204
「第二回 被告人訊問調書（大正13年1月17日，東京地方裁判所）」（『朴烈・金子文子裁判記録』，1977年9月，黒色戦線社） p.13によれば，降旗新聞売捌店。
- 11 註4のp.217
- 12 註4のp.219
- 13 註4『獄窓に想ふ』のp.363
- 14 註4のp.206
- 15 註7のp.27
- 16 註7のp.219
- 17 註7のpp.132～133
- 18 註7のp.135
- 19 「第二回 被告人訊問調書」（大正13年1月17日，東京地方裁判所）（『朴烈・金子文子裁判記録』，1977年9月，黒色戦線社） p.13によれば，砂糖屋鈴木錠三郎方。
- 20 註4のp.250
- 21 註4のp.226
- 22 註4『獄窓に想ふ』のp.359
- 23 石川啄木の詩ノート「呼子と口笛」の最後に置かれた詩。引用は『日本近代文学大系 石川啄木集』（今井泰子注釈，1969年12月，角川書店）， p.417
- 24 註7のpp.139～140
- 25 註4のp.249
- 26 「第二回 証人訊問調書」（大正14年8月29日，市谷刑務所）朴烈・金子文子裁判記録』，1977年9月，黒色戦線社） p.244
- 27 註4のpp.224～225
- 28 『マーチング・オン！ 救世軍その起源と発展』マルコム・ベール（2009年12月，救世軍出版供給部）， p.82
- 29 註27と同じ
- 30 『恵の座』ウイリアム・バローズ（2005年7月，救世軍出版供給部） pp.22～23
- 31 註30のp.39
- 32 註30のpp.38～39
- 33 註4のp.224
- 34 註4のp.235
- 35 註26のp.245
- 36 註4のp.235
- 37 註4のpp.243～245
- 38 「第三回 被告人訊問調書」（大正13年1月21日，東京地方裁判所）（『朴烈・金子文子裁判記録』，1977年9月，黒色戦線社） p.16
- 39 註34と同じ
- 40 註4のpp.206～207
- 41 慧林寺の住職。金子文子の父は経済の安定を考え元栄に文子と結婚することを勧め，文子も元栄に惹かれており，元栄は処女の女性に固執するところから話がまとまったが，文子の素行を問題にした元栄が一方的にこの縁談を破棄し，文子が捨てられたことを指す。
- 42 註4のp.215
- 43 註4のp.230
- 44 註4のp.246
- 45 註4『獄窓に想ふ』のp.375
- 46 註4のp.274

【主要参考文献】

- ・『何が私をこうさせたか』（『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』鈴木裕子編，2013年3月，梨の木舎）
- ・『朴烈・金子文子裁判記録』（1977年9月，黒色戦線社）
- ・『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』山田

- 昭次（2004年5月，影書房）
- ・「連載 大逆事件の救援史」亀田博（『救援』
2016年7月10日～2017年7月10日）
 - ・『立志・苦学・出世 受験生の社会史』竹内洋
（2015年9月，講談社）
 - ・『聖徒募集中!』チック・ユイル（2005年8
月，救世軍出版供給部）
 - ・『恵の座』ウイリアム・バローズ（2005年7
月，救世軍出版供給部）
 - ・『そして、神は性を創造された』チック・ユイ
ル（2006年3月，救世軍出版供給部）
 - ・『マーチング・オン！ 救世軍その起源と発展』
マルコム・ベール（2009年12月，救世軍出版
供給部）
 - ・『神の国を目指して』（2000年12月，救世軍出
版供給部）
 - ・『日本近代文学大系 石川啄木集』今井泰子注
釈（1969年12月，角川書店）
 - ・「1920（大正9）年から1930（昭和5）年の大
衆社会状況—昭和初期の都市大衆と農村民衆の
生活水準について—」小山昌弘（『東京外国語
大学 留学生日本語教育センター論集』34，
2008年，p.105～121）